世帯構成の変化（ｐ１７）

（高齢者のいる世帯数は、約 30 年前に比べて 2 倍以上に増加。「単独世帯」は全世帯の 4 分の 1 を占め、「夫婦のみ世帯」と合わせると半数を超える状況）

厚生労働省「国民生活基礎調査」によると、1986（昭和 61）年時点で 976 万 9 千世帯であった我が国の 65 歳以上の高齢者のいる世帯数は、2015（平成 27）年時点では 2,372 万 4 千世帯へとおよそ 30 年間で 2 倍以上増加した。

65 歳以上の高齢者のいる世帯について、世帯構造別の構成割合の推移を見てみると、1986 年時点では、三世代世帯が全体のおよそ半数近くを占めていたが、その後、一貫して減少し、2015 年では 12.2%となっている。

一方で、1986 年時点で 13.1%であった単独世帯の構成割合は、その後、一貫して上昇し、2015 年では全世帯の約 4 分の 1 が単独世帯となっており、夫婦のみ世帯と合わせると半数を超える状況となっている。

高齢者の生活水準（ｐ２４）

（経済的に心配なく暮らしている高齢者は 7 割以上。諸外国と比較しても経済的に困っていないと感じている高齢者の割合は高い）
これまで見てきたとおり、我が国の高齢者はその他の世代に比べて貯蓄額は多く持ち家率も高いことから、平均的に見れば、それなりの生活水準が維持出来ているといえる。

60 歳以上の高齢者の経済的な暮らし向きについて、内閣府が実施した「高齢者の経済生活に関する意識調査」でも、「心配ない」（「家計にゆとりがあり、まったく心配なく暮らしている」と「家計にゆとりはないが、それほど心配なく暮らしている」の計）と感じている高齢者の割合は全体で 7 割を超えており、80 歳以上では 80.0%と高い割合になっている。

また、高齢者の経済的暮らしについて、内閣府が実施した「高齢者の生活と意識　第 8 回国際比較調査」で諸外国と比較をしてみても、経済的に困っていないと感じている高齢者の我が国の割合は高い。